

# 地域住民による「相互学習」を実現するための試み —ある地域の日本語教室に焦点を当てて—

Richa OHRI, 高橋悦子, 野々口ちとせ

## 要 旨

地域の日本語教室において、日本人住民が外国人住民に一方的に日本語を教える姿勢は同化要請となり危険だという指摘がある。本研究は、地域で開講される日本語教室で行った、外国人住民と日本人住民とが共に学ぶ「相互学習の場」を目指した実践活動を通じて、「相互学習」実現の手がかりを探る。実践の結果から、特に外国人参加者の減少理由に焦点を当てて考察し、①外国人と日本人の参加者の教育観・学習観、②「相互学習」に関する理解度、③多言語リソース環境、④外国人参加者の生活と教室活動設計の関係、という4点が要因として得られた。

【キーワード】同化要請, アクション・リサーチ, 教育観, 学習観, 実践報告

### 1. はじめに

地域の日本語教室で日本人住民が外国人住民に対して一方的に日本語を教える姿勢は、同化要請となり危険だという指摘がある(田中 1996, 岡崎 2001)。これを踏まえて、昨今外国人住民と日本人住民とが共に学ぶ「相互学習の場」の提言や試みが見られる。「相互学習の場」の理念を実現するための教室活動設計や運営などに関する具体的な提案も出ている。(お茶の水女子大学大学院日本語教育コース 2001, 2002, 2003, 2004)。

しかし、「相互学習の場」を実践する教室は少ないという現状がある。そこで、本研究では、「相互学習の場」という考えに基づく教室活動の問題点を検討し、地域での教室活動の理念や方法について考える。

### 2. 研究の目的

本研究では、都内北部の地域日本語教室で「相互学習の場」に基づく教室活動を行い、教師や参加者から得た問題点を検討し、外国人と日本人との相互学習を目指した教室活動の実現を阻害する要因を考える。本稿では、対象現場で目立った問題点の一つとして外国人参加者(注1)の減少という事象を取り上げ、その理由を探る。

### 3. 研究の対象と方法

公民館で開催される地域の日本語教室において、

「相互学習の場」を目指し、Kemmis and McTaggart (1988) によるアクション・リサーチのモデルに従い、

計画→行動→観察→内省→改正した計画→行動→観察→内省→…

という流れで教室活動をしている。

本発表では、2003年春期(計14回)、2003年秋期(計14回)、2004年春期(計10回)の3期について、教師による活動報告と記録、日本人と外国人参加者からのフィードバック情報に基づき、参加者の減少問題に言及する。

### 4. フィールドの概要

教室の構成員は、ボランティアとして募集された日本人、日本語学習を目的とする在住外国人、日本語教師である(数は稿末資料参照)。日本語教師は、地方自治体からパートタイムで委嘱された4人で、週2回2人ずつが参加する。

教室は春と秋に週2回で、全14回開講される。時間は、春期が夜の6時半から8時半まで、秋期が午前10時から12時である。教室の開講一か月前からの募集で集まった参加者によって教室活動の内容は異なる。

### 5. 実践報告

#### 5.1 2003年春期

計画：日本人は「教える側」、外国人は「教わる側」

という関係ではなく、「互いに学び合う」の関係である教室活動を計画した（詳細は稿末資料1参照）。

**行動：**この期の初回申し込み人数は17人（外国人2人、日本人15人）。回を重ねるごとに外国人参加者は増加し、最大11人になった。しかし、単発的な参加者によるものであり、継続参加者は減少し、活動時間全部に参加する人も少なかった。また、活動前に活動計画を立案したが、実際の活動は当日の変更を余儀なくされた。

**観察・内省：**参加者の日本語力が想定したレベルを上回っていたためである。期後の教師ミーティングでは、参加者が「教える側－教えられる側」の関係性から脱していない活動という指摘が示された。しかし、第4回「押し花」（外国人8人、日本人8人参加）、第9回「料理」（外国人9人、日本人11人参加）では、日本人参加者も外国人参加者も「同じ学ぶ側」になっていたという指摘があった。

## 5.2. 2003年秋期

**計画：**秋期は、当該地域に住む主婦の参加が多いと予測し、活動計画が立てられた（稿末資料2参照）。

**行動：**第7回「料理」（外国人4人、日本人2人参加）や第10回「組み紐」（外国人2人、日本人3人参加）のような手作業を中心とした活動を通じて、外国人参加者と日本人参加者が母語、母文化を越えた人間関係の構築が可能になる活動を計画した。

**観察・内省：**この期の初回申し込み人数は12人（外国人2人、日本人15人）で、回を重ねるごとに外国人、日本人参加者共に減少した。期後、①連帯をもち続けられるような活動になっていない、②活動内容が参加者の実生活とかけ離れたものになっていた、③「相互学習」を目指す意図が参加者に伝わっていない、の問題点が出された。

## 5.3. 2004年春期

**計画：**2003年を踏まえて、2004年春期では日本人と外国人の参加者が次期も継続して参加できることを配慮して計画立案した。

**行動：**この期は、現在継続中であるが、活動計画立案に際して、教室内外で参加者間の良好な関係が構築できること、「相互学習型活動」の意義とその必要性を明示すること、活動計画に沿った具体的な活動内容を参加者の主体性に委ねること、を前提とした。開始時の参加者数は、外国人3人、日本人13人である。

**観察・内省：**現在継続中のため省略

## 6. 結果と考察

2003年春秋、2004年春の参加者数を見ると、回を重ねるごとに外国人参加者数の減少が見られる。日本人参加者数は、夜間開講の春期は一定しているが、昼間の秋には減少している。

ここでは、2003年春秋の教室活動を中心に、外国人の参加者数の減少について、教師による活動報告と記録、日本人と外国人参加者からのフィードバック情報に基づき、整理をすると、以下の点が要因として考えられる。

### 1) 参加者の教育観・学習観

参加者から「日本語を教えに来た」、「日本語を勉強しに来た」との声があった。日本人、外国人の参加者ともに、教室という場が一方的な関係の場という認識、教育や学習に対する考えが伺える。

日本語教室は「日本人が外国人に日本と日本語を教える場」という固定した見方が多いと言える。

### 2) 「相互学習の場」の理解

継続的に参加している日本人から「この教室でやっている目的が分からない」との声があった。この教室で目指している「相互学習の場」の意義を参加者が理解するには時間がかかること、参加者の理解が得られていない活動は、目標が不明確になり、出席に対する姿勢に表れたと推察される。

### 3) 活動内容の妥当性

外国人と日本人とが協働できる「押し花」、「料理」、「組み紐」、「習字」といった手作業などの活動内容を考えた。2003年春の「料理」など、一部の活動内容では参加者が多かった。しかし、教師が立案した活動計画に基づく活動内容は、外国人の実生活と日本語力に十分適したものとは言えない。これが活動に対する動機付けの強化に結びつかず、参加態度に表れたと推察される。

### 4) 活動の内容・方法

2003年春秋期では、活動計画をもとに、全14回の活動内容を教師が立案し、当日の参加者をグループ分けして活動を行った。2004年春期は、継続的な参加を促すために、グループを開講当初から固定化し、教師の作成した活動計画のもとで、各グループに活動内容を考えさせた。10回を終えて、開始時の参加者数を維持した。グループの固定化による参加者間の関係の強化、活動内容の自主選定による

参加態度の強化が考えられる。

ほかに、人的物的リソース環境も上記の全体に関わることで挙げられる。

上述の活動には、複数の母語に対応した人的物的リソースというサポートが必要である。このサポートの整備は、参加者への働きかけ、それによる活動の意義の理解、活動内容の改変、教室運営に大きく関与する。今回は、活動の意義の理解において、人的リソースの問題が顕著に影響したと考える。

以上、挙げた各要素は、参加者の生活状況や社会状況といった個人的環境要因とは別に、新しい理念に基づく活動の実施に大きく関わる可能性を持つものとする。

## 7. おわりに

地域の日本語教室を「相互学習の場」とするためには、価値観や意義の共通理解、適正な活動、関わる適当な人材、幅広く厚いサポートが必要である。これを求めることが、地域社会内での連携、個々の自律性につながると考える。

## 注

1. 本研究が対象とした教室では、相互学習の理念に沿って、「学習者」「ボランティア」という呼称を使わず、外国人参加者、日本人参加者と呼んでいる。

## 参考文献

- お茶の水女子大学大学院博士前期課程人間文化研究科言語文化専攻日本語教育コース教育実習報告書編集委員会 (2001)『多言語・多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース (2002)『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』平成 11～13 年度科学研究費補助金研究 研究成果報告書 (実践報告編)
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース (2003)『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究 日本語教育実習を振り返る』平成 14 年度科学研究費補助金研究 研究成果報告書 (実践編)
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース (2004)『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究 日本語教育実習を振り返る』平成 15 年度科学研究費補助金研究 研究成果報告書 (実践編)
- 岡崎眸 (2001)「多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教育」『多言語・多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース 111-138
- 田中望 (1996)「地域社会における日本語教育」鎌田修・山内博之(編)『日本語教育・異文化間コミュニケーション 教室・ホームステイ・地域を結ぶもの-』(財)北海道国際交流センター 23-37

りちゃ おーり／お茶の水女子大学大学院 国際日本学専攻  
たかはし えつこ／独立行政法人 国立国語研究所  
ののぐち ちとせ／お茶の水女子大学 文教育学部

稿末資料 1 2003 年春期 活動記録 (\*メールによる活動報告を基に、必要な箇所を抜粋した)

	参加者	活動内容	講師間の報告
第 2 回 (金)	外 2 日 14	すきなもの・すきなこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 7 時過ぎまで外国人 1 人。</li> <li>● 急遽、日本人ボランティアに対して、いまの現状と私たちが用意してきた内容などについて話した。そこで今後の進め方のためにも何か意見はないかと尋ねた。外国人 2 人の日本語力に差があるので、グループを二つに分けて行うという案が出た。</li> <li>● ひらがなより漢字を学びたい外国人がいるので、グループで話し合っ、体に関する漢字を、かな導入の時間に行った。</li> <li>● 日本人ボランティアの中で進め方に意見が分かれたグループがあった。一混乱あったが、なんとかまとまったよう。</li> <li>● 次回、教案作成を、2 人の外国人参加者用に分けて作成し、本日のように 2 グループに分けて行うという形で行うのはどうか。</li> <li>● さらにメンバーが増えたときに、どう対応するかという点については、いい案がない</li> </ul>

第4回 (金)	外8 (新2) 日8	押し花	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中学生の参加者は、やはり学校の授業にはついていけない。次は教科学習ができるといい。</li> <li>● 言葉にたよらずにその人らしさが表現できて、大変いい雰囲気。</li> <li>● 目指しているものが少し見えたような気がしたし、おそらく参加者にも伝わっていると思う。</li> </ul>
第7回 (火)	外11 (新2) 日10	かいもの ・予算内でおさまるよう に献立を決める。 ・材料の買出し分担を する	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中国人グループは日本人が1人も来なくて困っていた。</li> <li>● 予算「2500円じゃ足りないから自腹で払う」と言ったグループが2つ出た。グループはかなり不満のようで、予算を超過しそう。</li> <li>● 中国グループは日本人が2人も休んでいて、結構困っていた様子。</li> </ul>
第8回 (金)	外12 日10	料理レシピ作り	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 時間が余った。</li> <li>● 親子で参加の参加者は、中国人参加者とひらがなの練習。</li> </ul>
第10回 (金)	外10 日8	料理発表会 ・班に分かれて、料理 のレシピに絵を描いたり 写真を貼ったり感想を書 いたりした。 ・ポスターセッション風 に班ごとに発表した	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 雰囲気が良く質疑応答もあって8時半を過ぎてしまった。</li> </ul>
第11回 (火)	外9 日9	おでかけリサーチ ・自分たちが今後行 きたいという場所を決 めルートを書いて、発 表する。 ・外国人の発表	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 札幌、お台場の温泉、ディズニーランド、水上バスツアーなど。</li> <li>● 外国人の方たちが発表して、前回同様、うけていた。</li> </ul>

稿末資料2 2003年秋期 活動記録 (\*メールによる活動報告を基に、必要な箇所を抜粋した)

日時	参加者	活動記録	コメント
第2回 (木)	外:4 日:8 新:5	私の一日 ・最初の30分は新メンバーの自己紹介。 講師が例を示し、みなが従う。話が弾む。	・外国人参加者の一人が、かな練習張を持ってくる。講師はかなをやりたいのかと確認しなかった。
第3回 (火)	外:4 日:5	家の知恵袋 ・2つのグループに分けて話し合いをす る。最終的にはグループで面白話を 数人が報告をする。	教師がいたグループはなかなか話が進まない。
第5回 (火)	外:6 日:5 新:1	お習字 ・2時間習字をやる。雰囲気は良い。	・日本人参加者に一人に、刺繍免許を持っている。一芸披露はできないかと講師が尋ねる。作品を持ってくるようにお願いする。これ以降この参加者は3日ほど都合により欠席が続く。
第6回 (木)	外:5 日:6	料理レシピ作り 「最初の30分自由活動」	・外国人参加者は「かな入門がほしい」と言っていたが、どこにあるかが見つからず結局あきらめた。 ・バンガラ、中華、韓国の3つのグループ ・料理の準備に日本人参加者が非協力的←たけだ報告。
第8回 (木)	外:1 日:1	料理発表会キャンセル。 11時まで待っても誰も来ないから解散。	初めての最悪の状況。雨天。
第10回 (木)	外:2 日:3 (外1人が早退)	組みひも 講師が最後まで仕切る。	講師はなぜ参加者が来ないのかがすごく気になり、緊急事態であると報告。
第11回 (火)	外:2 日:2	おでかけプラン作成キャンセル	参加者の希望で「みんなの日本語」を行う。
第14回 (木)	外:0 日:1	さよならパーティーキャンセル。	今期は今までで最悪だった。日本人参加者と世間話。「このコースの目的がわかりません」といわれた。

\* 外) 外国人 日) 日本人 新) 新規参加者 新) 新規参加者